

平成29年(2月)1日発行 第23巻第6号(通巻第135号)

ナイフの魅力を余すところなく網羅した専門誌

# KNIFE

**鋏大全** All about the Scissors

**重野 守** カスタム・ナイフメイカー  
Mamoru SHIGENO

**藤川國宗作 小刀吉野**  
はたらく刃物[漆掻き]

## ナイフマガジン

12  
2017年12月号

**J.W. & John Denton**  
ラプレス・コレクション(後編)  
R.W.LOVELESS リバーサイド

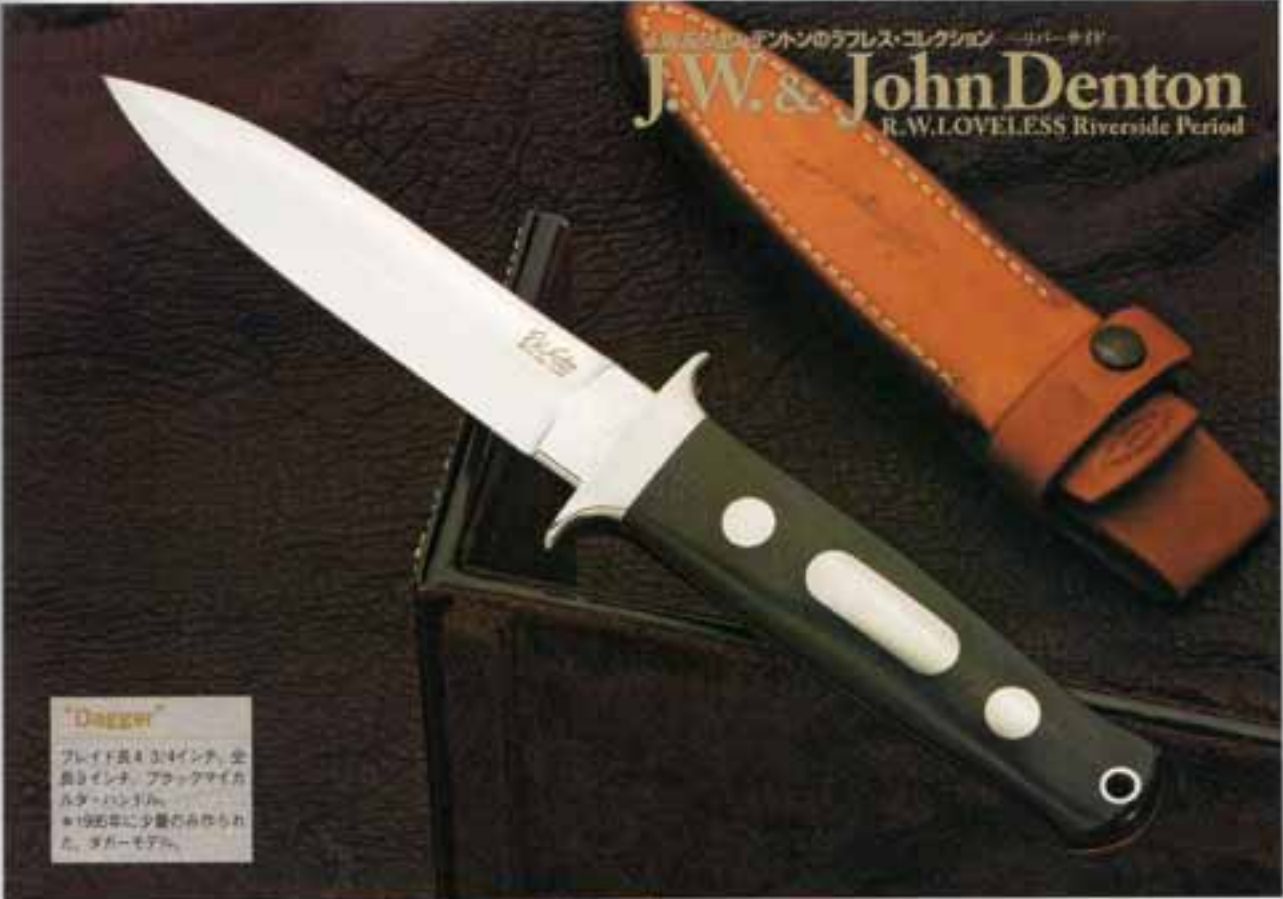


日本のカスタム・ナイフメイカー

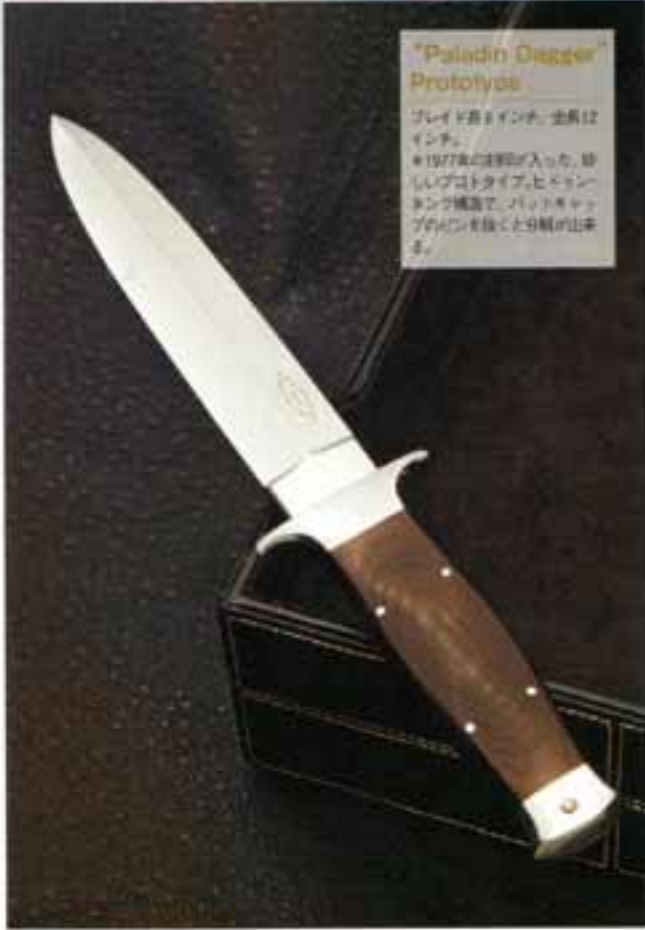
**鹿山利明**

Toshiaki SHIYANAMI

ジョン・デントンのラブレレス・コレクション — リバー・キラー —  
**J.W. & John Denton**  
 R.W. LOVELESS Riverside Period



**"Dagger"**  
 ブレード長4.3/4インチ、全長9インチ。ブラックマイカルター・ハンドル。  
 ※1965年に少量のみ作られた、ブギーモデル。



**"Paladin Dagger Prototype"**  
 ブレード長5.5インチ、全長12インチ。  
 ※1977年の試作型が入った、珍しいプロトタイプ、ヒートン・ボルト構造で、パレットキャップのピンを抜くと分解が出来る。

R.W.ラブレレス カスタム・ボールペン



**"D. B. S. Pen"**  
 全長4.1/2インチ。  
 ※1960年前後に少量のみ作られた、ラブレレス・ハンドメイドペン。金から、ステンレス、チタン、アルミ製のボディを持つ。デザイン・工務機密共に特許で、これまた稀少価値が高い。D. B. S. は「ダーク・ブルー・シヤン」の略で、「そういう人の強さのゲージに誇るだろう」というラブレレスのジョークから名付けられたのだという。

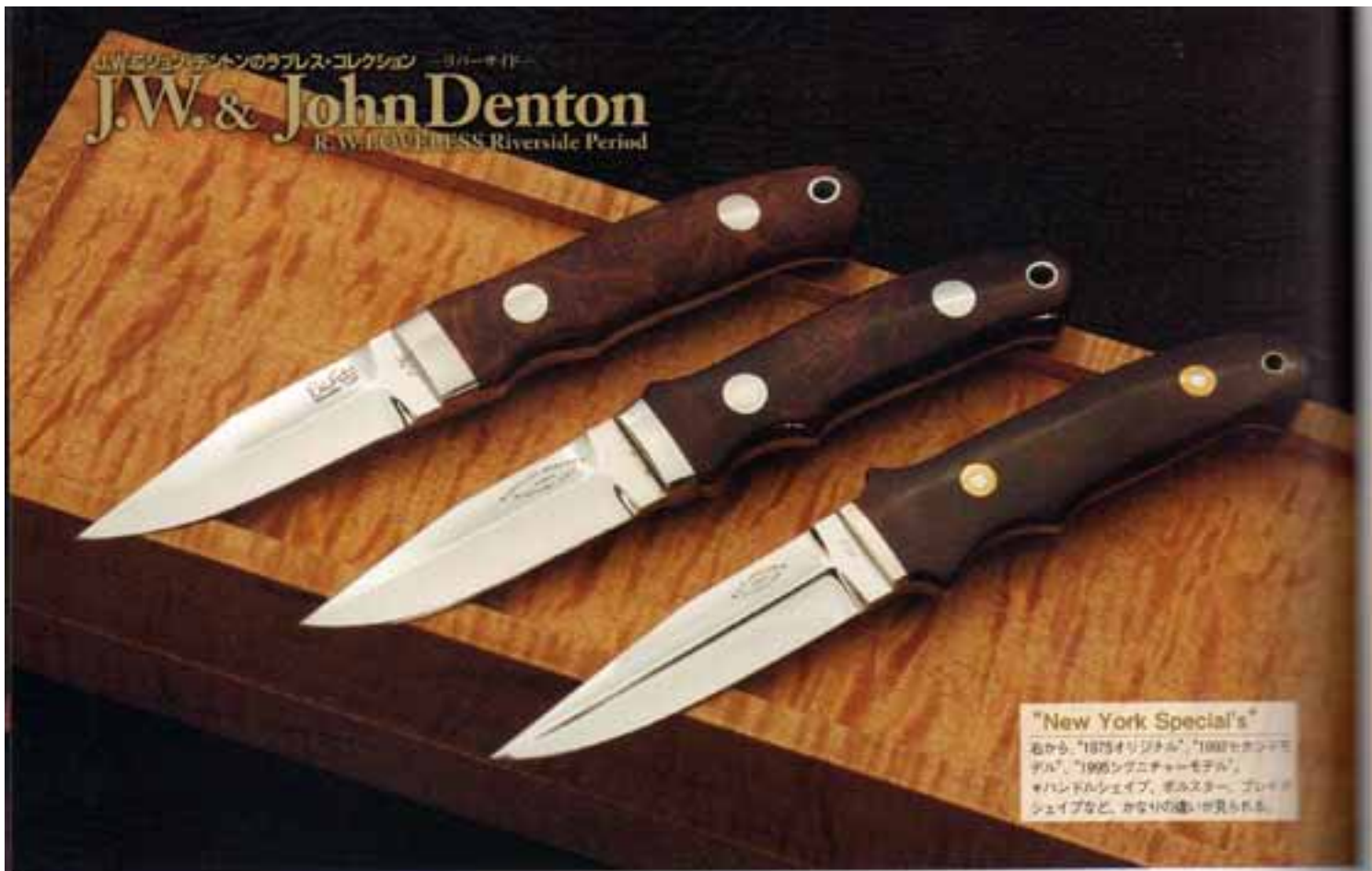


少く、デザインの通りステンレスモデル。ペンはバーカー社のリフィルを使っている。



くっきりとした「LOVELESS」ロゴ。ピシッと定まったチェッカーリングは、一流の証だ。

J.W. & John Denton  
R.W. HAYDEN'S Riverside Period



"New York Special's"  
 名から、「1875オリジナル」、「1888ヤングモデル」、「1906シグニチャーモデル」、「1996シグニチャーモデル」。  
 ＊ハンドルシェイプ、ボルトカラー、ブレードシェイプなど、かなりの違いが見られる。



オリジナル（左）とそれ以降のモデル、厚みがかなり違う。握り心地はやはりオリジナルの方がいい。



ハンドルに装備されたスナップ。このハンドル部のシェイプも、後期のモデルとはかなり違う。

「これは、本業の傍らに刀工としての腕を磨き、いざという時に備えていた。そして大企業での経験が、本業をある程度に支え、精神的にもブレズナイフを進化させていったのだ。その才能と努力は、彼が世に送り出した

「リバーサイド・ヒリオド」  
 1971年、またローレンティルの工場が閉鎖していた頃、ホブに転機が訪れる。



### “Big Bear”

ブレード長さ 10.5インチ、全長14インチ。  
 ※比較的新しい、シグニチャーロゴが入ったモデル。サブセルトの初期のシェイプがらそうと知られる。

「ガンダインジエスト40周年時」に、ラブレナイフが詳しく紹介されると、「一男に沢山の注文が舞い込みに始めたのである。さらには若きナイフマイカーであったS・R・ジョンソンが「パートナー」としてジョインすることになり、生産性も著しく向上していった。工場も手狭になり、ついに1974年、現在のリバーサイド工房に移転する事になった。リバーサイド期のはじめである。

この時期のボブはデザインを統一したラブレモデルの卒業と、それぞれのナイフにおけるフィット＆フィニッシュの



### Lawndale “Big Bear”

ブレード長さ 11.4インチ、全長13.12インチ、プラスセルト、メイプル・ハンドル、アルミ・バットキャップ。  
 ※ロンドンで製作されたビッグベアモデル。セルトの素材、シェイプ、開閉等や、セドゥン・タンク構造など、リバーサイドモデルとの違いが見られて興味深い。

向上に熱意を注いでいたがと他われる。新モデルとしては、あの稀少度で有名な「ニューヨークスベシヤル」や「バトルナイフ」、「ダガー」、「プロハンター」、「インテグラル・ハンター」など、意欲的な作品を繰り出させている。

### ニューヨークスベシヤル

1975年、ニューヨークシヨウで出会ったNYPD（ニューヨークポリス・パートナーメント）オフィサーからの依頼に応じて、ボブが作り上げたのが、「ニ



### "Battle Knife"

ブレード長7.125インチ、全長は11.25インチ。  
 ＊ジレット・3刃ウーのオーダーで、ウエルダナス・モデルを、よりワイドで分厚く、型で作られたモデル。これも少量しか作られていないことが判っている為、コレクターが職人の手で保っている貴重なもの。

ラフレスナイフの中で8インチという最長のブレードを持つのが、「ビッグ・ベア」である。最大の特徴は、「引き抜く」という操作のために設けられたサブヒルトだ。最初のモデルは1969年、ロンドン・タングからテイバード・フルタングへと変遷し、ヒルトの大きさやシェイプ、ハンドル材の固定方法などが違う、数々のモデルが存在する。

1995年、特別モデルとして、バレル長9.125インチの、「ベイビー・ベア」が作られ、コレクターのアル・ウィリアムズとJ・W・テントンのふたりにより、ボブからプレゼントされた。以降、マイン

### ビッグベアファミリー

このオリジナルモデルは7本のみが作られ、ラフレスナイフの中でも最少産は最高といえよう。その後長く作られることはなかったが、1992年、コレクターからの要望が高くなったため、約20本(2桁、20番台までのシリアルナンバーが入っている)が作られた。以後もオーダーがあるたびに作られているが、ホルスターの幅やハンドルのシェイプ、シリアルナンバー等から比較的身分けが付きやすいため、オリジナルモデルの価値は高くなりつつある。

「ヨーク・スベンヤル」である。目的はただひとつ。ボリスのバックアップ用に、軽量小型で安全にポケット内で持ち運びができるナイフ。である。ボブの妻は、ブレード長3.125インチ、全長7.125インチ、ポケット内で安定するよう四角くデザインされたシースに、抜け落ち防止のスナップが付いた「なんとナイフ」ハンドルにスナップの片側が固定されていた。極薄形モデルだった。



**"Fighter"**  
 ブレード長 1 1/2 インチ、全長 11 1/2 インチ、スタッグのハンドル。  
 ＊比較的珍しいファイター、ステンレス鋼のホルスターも付いた。



**"Dagger"**

ブレード長 4 1/2 インチ、全長 11 インチ。ごく初期に作られたダガー型で、ホルスターの幅が広い。このタイプは5本と作られていないという。



**"Mini Wilderness"**

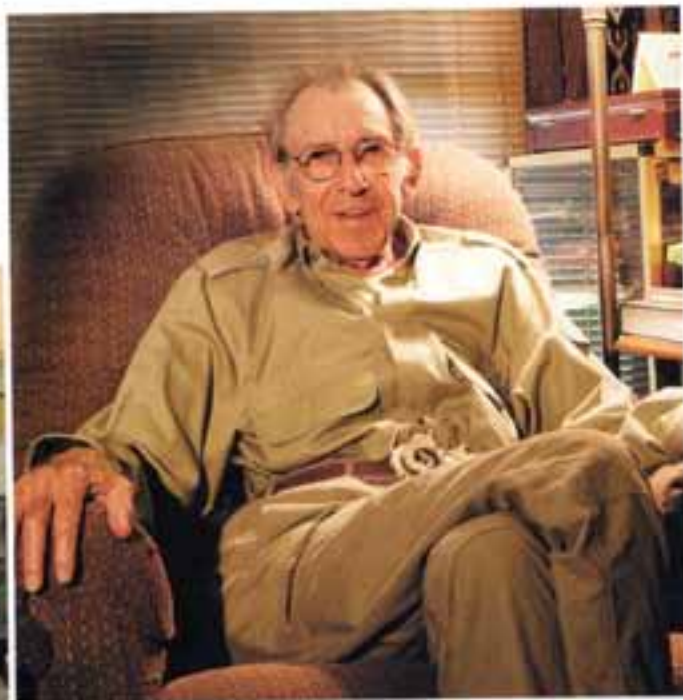
ブレード長 4 1/2 インチ、全長 9 インチ。  
 ＊これも数少ないワイルドネス・モデルの小型版。

J.W. & John Denton のラブレス・コレクション ローキヤ  
**J.W. & John Denton**  
 R.W. LOVELESS Riverside, Tenn.

今回の取材では、J.W. & John Denton のおかげで、70年代の貴重なラブレス・コレクションをカメラマンに収めることが出来た。心から感謝したい。リバーサイドのナイフもここまではページが尽きてしまった。次の機会にまた、貴重な、ハンター'のコレクションをお届けしたい。

## John Denton

口刃の電子を、閉口は他が普通のシロウに準拠してタイスブレイクや既製をしている。ラブレスナイフに関する知識は、その知識だけで、あらゆる質問に答えてくれるナイフ師だ。ブレイクシロウでシロウコシロウで使うことができる。革に縫いこむのは、お気に入りのロンドン・エドワード・ブレイク。



J.W. Denton

異様なコレクションを公開してくれた。J.W. Denton、ラブレスナイフのコレクター・ブレイクとして、広く知られた存在である。「ラブレスの車なら100に届くといふ」といふのが通説になって、そのどの車種でもあり。

2000年の暮、アルに呼ばれたJ.W.は、驚くべき申し入れを受ける。アルの300本近いラブレスコレクションをすべて引き取ってほしいが、というのである。

「買ったよ。他にも運搬費はあったらどうに、あえて私を運んでくれたのは嬉しいかったがね。それでもアルの胸中を考えると複雑だったよ」

つまり、今回撮影させて貰った「門外不出」のナイフ達の多くは、あの「ブレイク・ブレイク」に登場した「ザ・ナイフ」だったのだ。

四半世紀の長きにわたって表裏を繰り返し返してきたスーパースティック、それがJ.W. Denton・コレクションなのである。

## リバーサイド・ピリオド

ラブレスナイフをコレクターの立場で、その特徴やナイフに入れられたロコの遠いから分類すると、「テラウエア期」、ロンドン・ピリオド、リバーサイド期の3つに分けられる事が多い。他にも、ラブレス・ジョンソン期、や、ノースハリウッド期、シエラマドレ期、など、ロコに入れられたパイプの名前や、工房のあった地名に細かく分類する向きもあるが、ここではナイフの造作自体に大きな変化がある、この3期説をフォローしたい。

### ①テラウエア・ピリオド

1954年に初の自作ナイフを完成して以来、1959年にカリフォルニア州に移転するまでのナイフには、「テラウエア・メイド」(Decker Mold)の印章が彫り込まれている。これは、「テラウエア期」というほどの意味で、エピソードもどうしてこのように名前にしたか

構えていない」と語っている。工房自体はテラウエア州クレイメントにあった。

この頃の作品には、レザーワッシャー、ハンドル+カラスベイヤ、小振りのブラスヒルトにアルミのパットキャップ、という仕様が基本で、当時のリテイルショップであったニューヨークの「Ayer, Corbin & Fitch Co.」や、シカゴの「Van Lengen and Anson」のダブルネーム刺印が多く見られる。

機軸なカーブを描くハンドルの握りやすさは格別で、大型のボウイにはサブヒルトを装備するなど、数々の工夫が見られる。ブレイドは基本的に鋸歯だが、後期には、当時としては画期的であった、ストッキングムーバール製法のナイフも誕生している。

### ②ロンドン・ピリオド

テラウエアを離れカリフォルニアに移住したホブは、仕事(本業のエンジニア)の都合で州内を何度も転居している。当初はアバークロンビーとの関係がまだ残っていた為、「テラウエア・メイド」ロコのナイフも作っていたようだ。しかしホブにとつての1960年代は、ランドールの機軸を脱却して、ラブレス・オリジナルナイフを調然と開花させる重要な時期となった。以前から温めていたアイデアとして、フルタング機軸、それもナイフバードタング+マイカルタハンドルのナイフが登場するのはこの頃だ。

また、ヒルトレスの「インブルー」・「ハンドル」・「ヤドロップポイント」・「セミス・キナー」など、後年ポピュラーとなるモデルの基礎となるバリエーションが幾々と登場している。また、いわゆるラブレススタイルのダブルグライント・ファイターがデビューし、その後期にはあの「ビッグ・ベア」がその印象的な姿を現し



**"New York Special" Original Model**  
 ブレード長3 1/2インチ、全長7 1/2インチ、ブラウン・リネン・マイカルター・ハンドル。  
 ＊アサヒ社から1975年オリジナルのもの1本、433号と認別が入っている。デントン家ではこのほかに、433号も所有している。ケースにはマッシュングが入っている。

「最初に、愛蔵版で出てきた」  
 まず初めに「W・W」はすべてのモデルをオーダーしたようだ。  
 「彼には、ナイフ哲学があった。私の腰に狂いがなかったのを確信したよ」  
 当時のホブは、すでに人気マイカーとして知られており、オーダーにはパワックロウ（ウェイティング・リストン）があった。それでも彼が参加していたナイフ

「その頃のラブレスナイフは、他のマイカーの作品に比べると、すべての面で遠くまで残っているモデルはすべて買い取らせてもらいたいとホブに申し入れた。」  
 「その頃のラブレスナイフは、他のマイカーの作品に比べると、すべての面で遠くまで残っているモデルはすべて買い取らせてもらいたいとホブに申し入れた。」

「その頃、過去の作品、扱われていたテラウエア・メイトや、ロンドン時代に製作されていたラブレスナイフも市場にあるものは勿論、積極的に探してコレクションを充実させていく。」  
 「そして出てきたのが鉄骨入りのラブレスコレクター、アル・ウィリアムスだ。」

### アル・ウィリアムス

アル・ウィリアムスといえば、ラブレスコレクターから、パイプ、と呼ばれている。「The Blade」誌（1990年）2月号のラブレスカスタムを時代ごとに分類した歴史的なグラフィックの著者として有名なコレクターである。

「あのグリーンバック（リビング・オン・ジ・エッジ）のニックネーム」に登場するナイフ達は、すべてアルのコレクションの一部だ。あの中の一つは本数が、我々あたりが機会になって探したモノなんだ。当時のアルは、世界一のラブレスコレクターだったのは間違いないと断言する。

「アルのコレクションは、グリーンバックの副題（Logos of the Lovelless Legend）：ランクスに記述されるロゴ（くらの意）にある通り、ナイフに入れられたロゴにこだわっているんだ。つまり同じ年代で作られた、同じロゴの入ったナイフにはそれほど興味を示さなかった。キープで私の出番となるのだ。」

「J・W」のコレクションの基本は「Buy, Sell and Trade, Forever」  
 と「大きく仕物があれば買う。珍しいモデルがあれば、手元にある複数のモデルとの交換にももちろん応じる。何本も所有するモデルはリースナブルな値段でも売る。そうしてファン্ডを貯め、より稀少なモデルも手に入れていく。」

「コレクションを始めて以来、私の手元を通り過ぎていったラブレスナイフは数千年に上ると思う。今思えば、貴重なナイフもあった。しかし、コレクションは「キープ・マン・チ・ナイフ」だからだ。」



# J.W. & John Denton

TEXT・PHOTOS: HIRO SOGA

R.W.LOVELESS Riverside Period

## J.W.&ジョン・デントンのラブレス・コレクション

—リバーサイド—

後編



### デントン・コレクション

ボブ・ラブレス・カスタムナイフ。

1984年、若き船員だったラブレスが一念発起して作り上げたハンドメイドナイフ。当初は、すでに当時人気が出始めていたランドールナイフの模倣から始まったラブレスのナイフだったが、年月を加えるたびに独自のデザイン、優れた機能、さらには画期的な製造方法や、ずば抜けたフィット&フィニッシュで、カスタムナイフの規範となっていた。

思い入れはそれぞれだが、その桁外れの高価格や稀少性から、カスタムナイフ界でも常に話題を振りまいている存在なのは間違いない。

今でこそ、ラブレス・ナイフコレクターは世界中にたくさんいるが、コレクション自体がそれほど一般的ではなかった1980年代初頭、ラブレス製ナイフであればとにかく「買い」というコレクターがいた。

J.W.・デントンである。

「それ以前の私は、キンバー社製の22口径ライフルとシユレイド社やケイス社のボケットナイフを、それこそ山ほど蒐集していたんだ。自慢のコレクションだったよ」

「どこごろかある日、ラブレスナイフに出会ってしまった。そのデザイン、機能性、仕上げ、素材、と、どれもとってむ文句なしだった。自分のコレクションが急激に色褪せてしまっただけ、すべて手放してしまっただけ」

「まず、ボブ・ラブレス本人に会いに行った。当時のボブは、胸が張りきった、というのかな、とにかく豪気軒昂でバイタリテイの塊のような人だったよ。双方共に車好きで、特にプライベート・レーズカーではお互い一言も持っていないこと

平成29年10月1日発行 第23巻第5号(通巻第154号)

ナイフの魅力之余すところなく網羅した専門誌

**J.W. & John Denton**

ラプレス・コレクション(前編)  
デラウェアメイド～ローンデール

加藤清志のダマスカス・ナイフ  
DAMASCUS Knives of KATO

藤田國宗作 小刀薄緑  
はたらく刃物[竹細工]

**ナイフマガジン**

10  
周年

Horiyumi HIRAYAMA

平山晴美

気魄に満ちたナイフ製作と、その深化

根本朋之  
NEMOTO KNIVES



# J.W. & John Denton

Delaware Maid ~ Lawndale

## J.W.&ジョン・デントンのラブレス・コレクション

—デラウェアメイド～ローンデール—

前編



### ラブレスのことは彼に訊け

ジョージア州ハイアワシー。  
アトランタから車で北に2時間ほど、  
縁に思われた小さな街である。

もう半分以前から、「ラブレスナイフ  
のことでなら、J.W.に訊くといい」と、あ  
ちこちで聞かされてきた。

何れも、もう25年以上も前からラブレ  
スナイフのコレクションを続け、そして  
専門のディーラーになってしまったのだ  
という。一度話を伺いたいと思っていた  
のだが、いかんせんハイアワシーは遠か  
に遠く、近頃はJ.W.自身もナイフショウ  
にはそれほど顔を出さなくなっていると  
かで、機会を逸していた。

ところが昨年9月、初めて訪れたシ  
カゴ・カスタムナイフショウで、興味深  
いテーブルに行き当たってしまったので  
ある。

このシカゴショウというのは、現在急  
激に観客動員数を増やしている比較的斬  
新しいショウで、全米、土曜の2日間、  
通常のナイフショウだけでなく、タクテ  
イカルナイフ専門の抽選方式ショウやカ  
スタムナイフ・オークションなどを詰め  
込んだ、新しいスタイルのイベントなの  
だ。テーブルのキールダー「出展者」も  
バラエティに富んでいて、アーニー・エ  
マーソン、ジョンヤング、ブラリアン、  
タイ、チャリー・ワイズといった錚々  
たるメンバリーやディーラーが揃っている。  
そんな中に、珍しいローンデール時代  
を始めとする、ラブレスナイフをずらり  
とばかり、20本以上も並べているテーブ  
ルがあった。

テーブルの奥側には若い男性が座っ  
ており、愛蔵品を手にしている様子が見え



**Harry Archer Collection  
"Fighter"**

ブレード長6.12インチ、全長11.314インチ、黒いビニールリップウエットのハンドを覆われたファイター。



**Harry Archer Collection  
"Big Bear"**

ブレード長11.4インチ、全長13.314インチ、これもハリー・アーチャーが考案したもので有名なローンデル・ロゴのダブルグラインドのシェイプはすばらしい完成されている。

**ハリー・アーチャーコレクション**

マントンの門外不出コレクションは多種多様で、そのいわれを訊いているだけで日が暮れてしまう。そのすべてを紹介するのは不可能なので、ラフレズナイフの中でも人気の高い、シユートナイフに関する「面白話」を披露しよう。

まず、シユートナイフの名前がどこから来たか、ご存知だろうか。まあ、アルファベットを見れば一目瞭然なのだが、「パラシュート」の下、それもミリタリー関係者用にデザインされたナイフ、と



**Harry Archer Collection  
"Boot Knife"**  
(上)

上：ブレード長5インチ、全長8.12インチ、ローンデル・ロゴのブレード、ダブルグラインドのシェイプはすばらしい完成されている。

**"Sticker" (下)**

ブレード長4.12インチ、全長8.314インチ、ブレードがより薄く、セドゥンタング構造で作られている。

いふ事はこの名が付いたのだ。

このシユートナイフをデザインした張本人は、ハリー・アーチャーという、最前線での軍隊経験を持つ者であった。

ハリーは、「ナイフズ」などの著書であるケン・ワナーと友人で、以前から現場でユーティリティナイフとして使われる、堅牢無比なナイフを探していた。それまでも、パラシュート降下時にロープの緊急切断が必要になった際に使えるブッシュダガー（ガットフックのようなロープ切断ツールが装備してあった）を開発していたが、より広範囲でパラシューターが使えるナイフを考案していた。



**"2pcs. Stag Banana Skinner"**

ブレード長4 1/4インチ、全長11 1/2インチ。グリーンブックスP40に載る。スキナー、通常より幅の狭いブレード、横切したヒール、2ピース・エッジ、コンパス内蔵などの特徴がある。



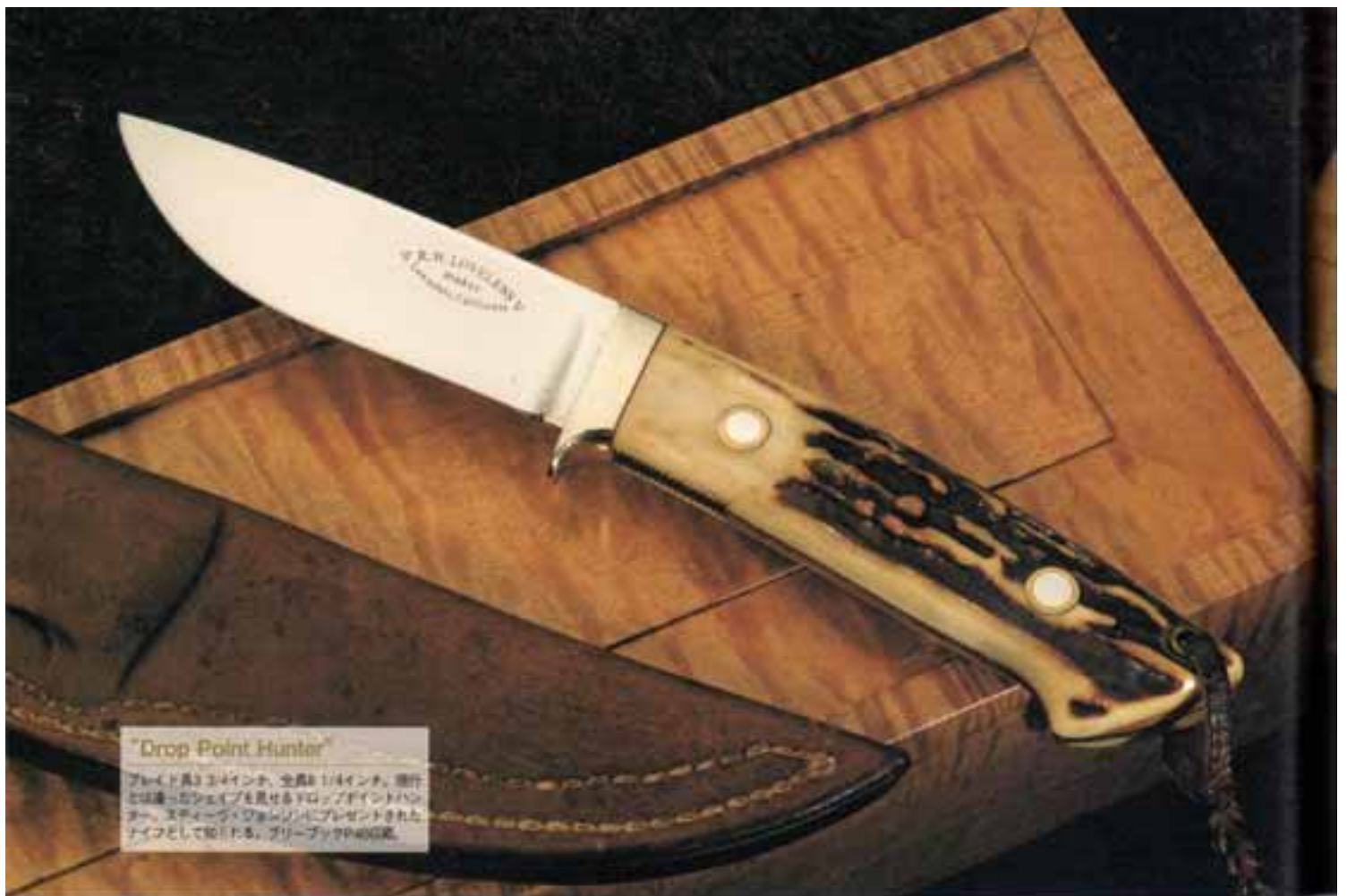
当時のオプションとして、プラスチック「Buck's」という文字をステンレス鋼のブレードに彫りこんだものがあった。これは部分的なレイアウトもオプションである。

たのである。  
基本的なアイデアはあった。あとはそれをどう具体化するか、だったのだ。そこでナイフ界に詳しいケンが思いついたのが、当時ナイフのデザインならこの人といわれていたボブ・ラフレスだった、というわけだ。  
そして出来上がってきたプロトタイプは、ハリーが理想としていた機能とスタイルをすべて併せ持っていた。細かな変更はあったが、こうしてかの有名な「シユートナイフ」が完成したのである。  
ラフレスナイフの完成度が気に入ってしまっただけで、その後も細かな意見を自分好みにしたナイフを次々とオーダーしていった。そして集まったのが、現在はデントン家に在るハリー・アーチャー・コレクションという事になる。

**"Utility Hunter"**

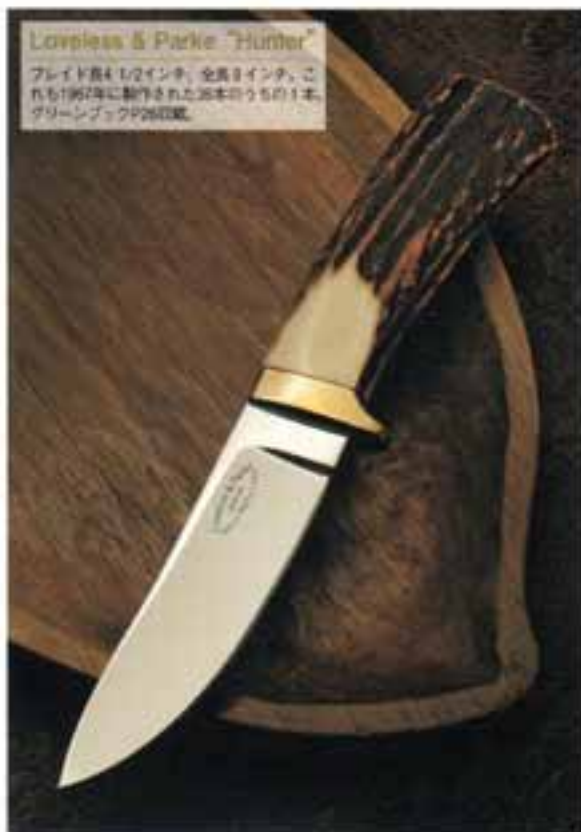
ブレード長4 1/2インチ、全長5 1/4インチ。タンクに「70-401」と刻印されている為、1970年に作られたと思われるユーティリティーハンター。グリーンブックスP51搭載。





**"Drop Point Hunter"**

ブレード長3.4インチ、全長8.1/4インチ。流行とは違ったシェイプを具せるドロップポイントハンター。エマーソン・ワイルドにプレゼントされたナイフとして知られる。グリーンブックP4000E。



**Lovell & Parke "Hunter"**

ブレード長4.1/2インチ、全長5インチ。これも1967年に製作された36本のうちの1本。グリーンブックP2600E。



**Lovell & Parke "Semi-skinner"**

ブレード長5.1/2インチ、全長10.1/2インチ。アイボリーハンドル。1957年に36本だけ製作されたといわれている「ラッセル&パーケ シェリヤード」のコレクションのロゴが入ったナイフのうちの1本。



メールをチェックし、仕事を済ませ、  
実際のコンピュータ操作としての仕事は  
すべては、ジョンがこなしている。

**LOVELESS/JOHNSON**  
"Improved Handle  
Semi-skinner"

ブレード長 3 1/2 インチ、全長 8 1/2 インチ。  
ダブロンコ、インブルーブドハンド  
ル、ブラックナイロン、と移しどら  
はのセミスキナー。

**LOVELESS/JOHNSON**  
"Randall Hunter"

ブレード長 2 3/4 インチ、全長 5 1/4  
インチ。ダブロンコ、ハンティング  
Randall がデザインした心型ハン  
ドル、黒いブレード、ヒルトレスハンド  
ルのシェイプなどに特徴がある。



**LOVELESS/JOHNSON**  
"Drop Point Hunter"

ブレード長 3 1/2 インチ、全長 6 インチ。これ  
も約 40 年しか存在しないといわれる「ラブレ  
ス/ジョンソン・ロゴ」の内の 1 本。中央部に  
彫り込まれたみを見せるハンドルが美しい。







ニューヨークにあった高級スポーツ用品店「アバークロンビー＆ファッチ」の創設者が入っている。おそく1959年に同時に納入されたものであろう。



**DELAWARE MAID  
"Hunting #6"**

ブレード長4.5インチ、全長8.1/4インチ、グリーンバックP12に裏面のハンターモデルと類似している1本、ただしシリコンナイフは6本。

しまったんだ」

当時といえば、ナイフメイカーズギルドが発足して10年、ブレイドマガジンの創刊され、一般にコレクションの対象としてナイフが注目され始めた頃である。「そこで出会ったのがラフレスナイフだった。そのデザイン、質感、仕上げ、握りやすさ、機能性、どれをとっても最高だったな。早速本人に電話をしたよ」

J.W.は1950年代、カールスのブライベートライバーとして活躍していた時期がある。車好きなボブとは最初から意見合点してしまっただろうだ。

「その頃私が使っていたイギリス製のリースエンジンに、エイバー、というのがあってね。なんとボブもエイバーのファンだったのさ」

そうして知まったかなりの付き合いは、1985年、ノックスピルで開かれたブレイドショーで直接出会う。より緊密なものとなる。そう、それまでの数年間は、ナイフのオーダーや日頃のやり取りなど手紙や電話が中心で、親密ではあったがまだ会った事はなかったのだ。

「なにせ3000マイルは離れているからね。ともあれ、直接会うことが出来て私の腹に狂いが無いことははっきりしたよ。何はともあれ、凄いやつだった」

ここで、J.W.はボブにとって遠征に水の申し出をする。

「当時のボブは人気メイカーではあったが、参加していたショーで持ってきたナイフがすべて売れてしまう、というほどではなかった。値段が他のメイカーより高かったからね。それで、もし持ち帰るナイフがあるなら、すべて私に譲って欲しい、と頼んだのさ」

それからJ.W.は「買い」に走る。市

場にあるラフレスナイフは、すべて「買い」だ。ボブには前金でオーダーをいれたりもした。珍しいモデルを手に入れるために、手元にあるナイフを売る、交換するというのは当たり前で、どんな自分のコレクションを充実させていったのである。数多くのコレクターとも関係が深まっていった。

「中でも得意になったのは、アル・ウィリアムスだったな。リビング・オン・ジ・エッジ」という本は知っているね？」

これはもう、ラフレスコレクターなら必ず持っているといえるバイブルで、その表紙の色から「グリーンバック」と呼ばれている。

「あの本は1992年に発行されたのだが、紹介されているナイフのうち何本かは我々が一緒に探したのなんだよ」

「そんないきさつがあって、アルのコレクションはそのほとんどが私の手元のことになったのさ」

そう、今回の取材でわかったのだが、あのグリーンバックに登場した、ラフレスナイフの各時代を象徴するナイフ連の多くは、今もデントン家が所有している。四半世紀以上にわたって卒業を繰り返してきたコレクション。それが「デントン・コレクション」なのである。

**デラウェアメイド・ロンドンデル**

本種では、デントン家の協力により写真枚数が大幅に増えたこともあり、コレクションを前後編に分けて紹介したい。今回は、ラフレスナイフの創成期であるデラウェア期から、様々なモデルが生まれていく模様、充実の期間となったロンドンデル期をカバーする。

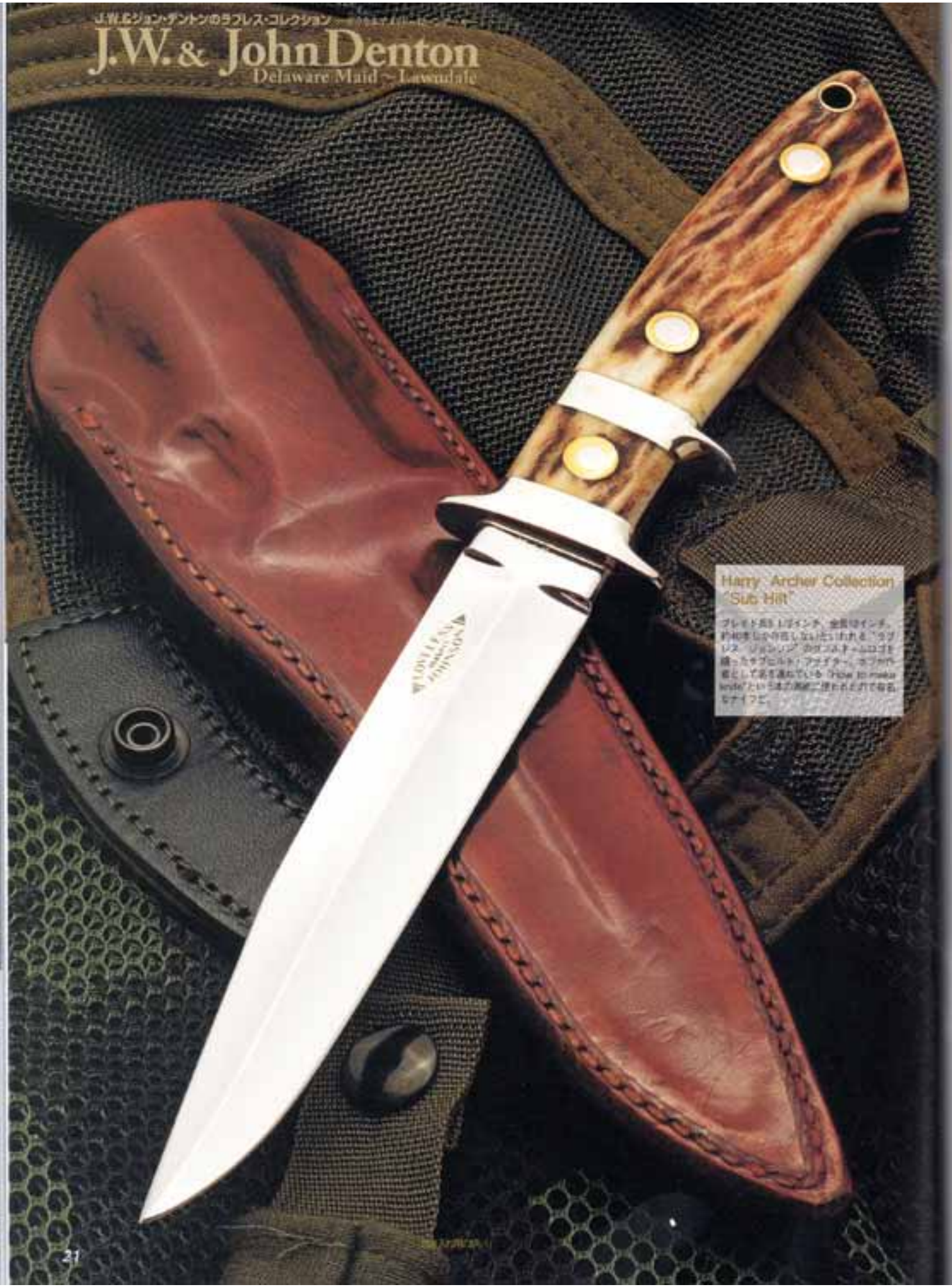


**DELAWARE MAID  
"Hunter's"**

上:ブレード長4.1/8インチ、全長8.1/2インチ、下:ブレード長3.3インチ、全長7.1/2インチ、れもアバークロンビー＆ファッチの創設者が入れられたハンター・プラスのヒートが深い。

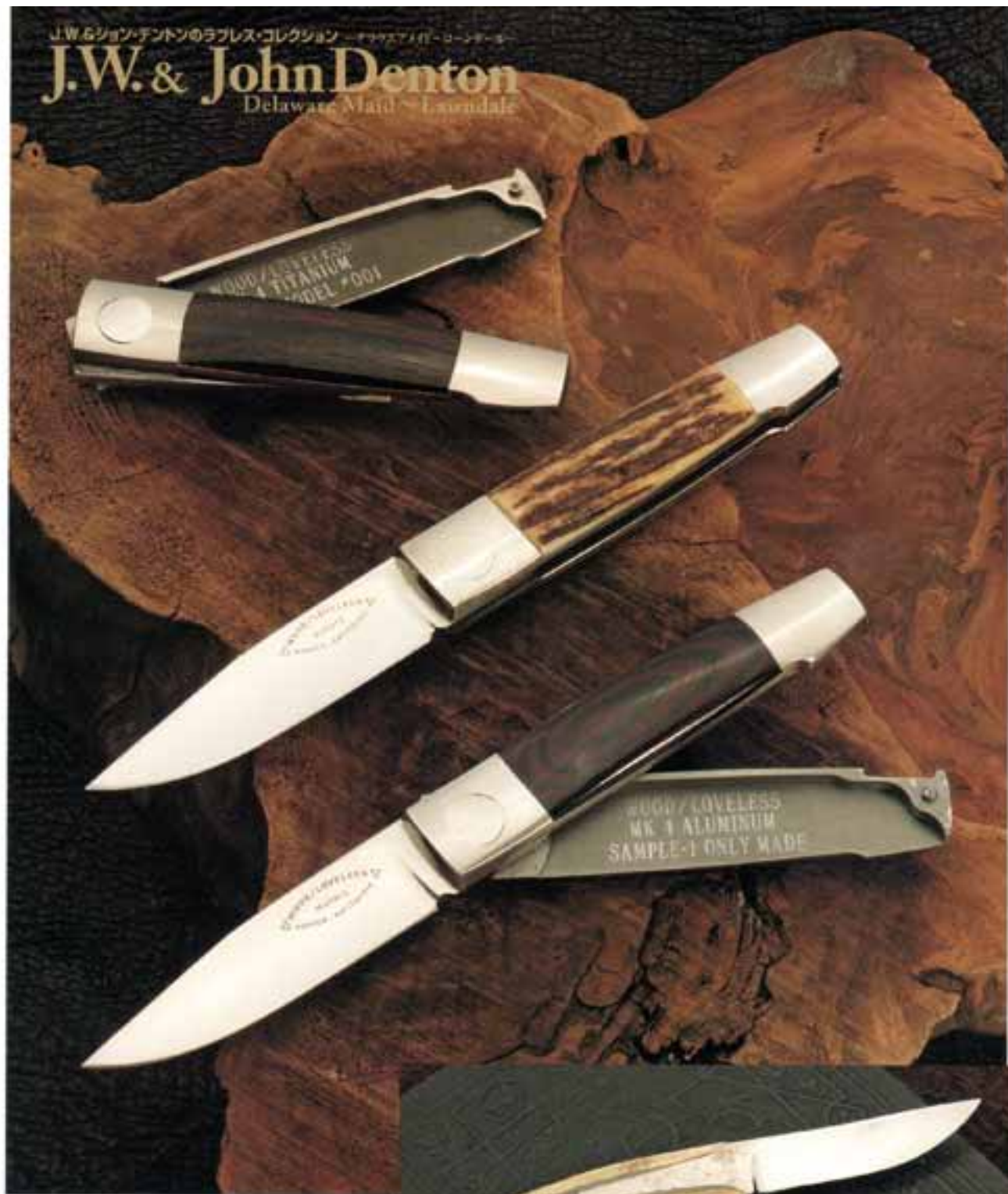
ラフレスナイフが、生まれたいきさつはよく知られている。若き日のボブが、高級スポーツ店であった「アバークロンビー＆ファッチ」に、当時高級カスタムであったロンドンデルナイフを買いに行った。若輩の船員といったボブの外観から、けんもほろろの扱いを受けたことで一先発起して、ロンドンデルを超えるカスタムナイフを作り始めた、というあれである。

J.W. & John Denton のラフレシ・コレクション  
**J.W. & John Denton**  
Delaware Maid ~ Lawdalf



**Harry Archer Collection  
'Sub-Hit'**  
ブレード長 175mm、全長 210mm、  
約 40g。シカ角の柄に 4 個の黄銅ボルトを  
備えたサブヒット。ブレイク、ホブ  
ンとしてある。この「How to make  
steel」という言葉が柄に刻まれている  
ナイフだ。

J.W. & John Dentonのラブレレス・コレクション — ナラクス・ア・イ・バ・ロー・ン・ター・キ  
**J.W. & John Denton**  
 Delaware Maid ~ Laurelale



**WOOD-LOVELESS "Folder"**

ブレード長3.12インチ、ハンドル長4.12インチ、10ヶ月の間だけ製作された、パリー・ウッド/ボブ・ラブレレスのクラゲレイションフォルダー。ハンドルフレーム材に、ステンレス、アルミ、チタンという違いは在るが、トータルで印本しか作られなかった。写真では、上からチタン製、ステンレス製、アルミ製、となる。チタンとアルミのモデルはサンプルで1本ずつだけ作られたもの。

**"Hidden Tang Utility"**

ボブのヒドゥンタンジ構造を見せるためにハンドルをカットされたモデル。タンジ部分には切り刃があり、どんなに深く使っても折れてくる事はない。

**"Hidden Tang Micro Blade"**

ブレード長2.12インチ、全長6.12インチ。

